

Title	歴史に対する近代の認識論的考察
Sub Title	
Author	川合, 貞一(Kawai, Teiichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.1, No.2 (1922. 2) ,p.171- 214
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220200-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

史

學

第壹卷

第貳號

大正十一年一月

歴史に對する近代の認識論的考察

—

十九世紀に於いて勃興した自然科學的精神は歴史其物とも自然科學的のものたらしめねば止まなかつた。即ち歴史に於いて法則を見出すと云ふのが其の標語であつたのである。それで歴史が科學であらうと云ふには、普遍的法則によつて其の事實を説明すべき任務を有さなければならぬと考へられたのである（註）。かう云ふ歴史觀に對して先づ反対の聲を揚げたのがショーベンハウエルであると云ふことが出来るのである。

（註） Bernheim, Lehrbuch der historischen Methode. 5te und 6te Aufl. S. 101-102 参照

II

歴史に對する近代の認識論的考察（川合）

一七一

ショーペンハウエルは曰ふ(註)。科學なるものは數へられ得る多數のものを分類して之を種の概念の下に集め種の概念をばまた類の概念の下に集め、かくして普遍と特殊とを認識する途を拓くのである。而して其の認識たるや個々に就いて考察されずとも、あらゆるものに當嵌まるのであるからして、無限の特殊を包括する譯である。あらゆる科學は相並んで各其の範圍に屬する對象を研究し、哲學は科學の準備したる所のきのに解決を與ふる最も普遍な最も重要な知識として其の上に位するのである。所が歴史なるものは、本來其の仲間にに入るべきものではない。何故かと云ふと、歴史は科學の誇りとしてゐるやうな利益を有することが出來ないからである。蓋し歴史なるものは認知された對象をば從屬の關係に置くものではなくして、單に之を並置するだけのものであるからして、科學たる根本性質が缺けてゐるからである。それで如何なる科學に於いても系統なるものが存してゐる譯であるが、歴史にはそれがない。従つて歴史は知識ではあるが、科學ではない。歴史は決して個々のものをば普遍によつて認識するものではなくして、個々のものをば直接に擗まなければならぬものである。かくて謂はゞ經驗の大地を這はなければならない。然るに眞の科學はそれ以上に出でゝ個々のものを支配するに止まらず少くもある範圍内に於いては其の事象の可能を豫見する所の包括的概念を得るのである。一體科學は系統であるからして其の談る所は常に類に就いてゞあるけれども、歴史は然らず個體に就いてゞある。それで歴史は科學になることが出來ない。と云ふのは個體の科學と云ふやうなことは矛盾であるからである。

それから又科學なるものは概念の系統である所からして其の談る所は常恒に存する所のものに就い

てある、けれども歴史は一回限りのものに關するものだと云ふことになるのである。且、歴史は其の性質上盡すこととの出來ない個々單獨なるものを取扱ふのであるからして、歴史の知る所はすべて唯、不完全なもの、半端なものに過ぎない。それで歴史は日の改まる毎にいつも是れ迄知られなかつた所のものを教へられなければならぬ。かく云ふふと人或は歴史に於いても特殊なるものをば普遍の下に從屬させる云ふことが行はれる。時代、政府、其他の重要な變化及び國家の變化、一言以つて之を謂ふと、歴史年表に現はれた所のものは悉く普遍なものであつて、特殊なるものが之れに從屬すると論じて反対するかも知れぬ。けれども是れは普遍と云ふ概念を誤り解したものと云はなければならない。何故かと云ふと、茲に擧げられた歴史上の普遍なるものは單に主觀的のものであり、事象の個別的知識の不十分な所からして起つて來るものであつて、客觀的のものではない、事象其物の中に共に考へられ所の概念ではないのである。で歴史に於ける最も普遍なものであつても、それ自體はやはり單に個々單獨なるものである、つまりある長い時間とか若くは主要な事件とかである。それで特殊なるものの、さう云ふものに對する關係は部分の全體に於けるが如きものであつて、あらゆる自然科學の場合に見るが如き事件の法則に於けるが如き關係ではないのである。科學の與ふる所のものは單なる事實ではなくして概念なのであるからして、普遍なるものを正しく知りさへすれば現はれ来る所の特殊なるものは確に規定することが出來得られるのである。例せば三角形に關する法則一般を知れば目前に在る三角形のどう云ふ屬性を有すべきかを其の法則に従つて示すことが出来るのである。而して又あらゆる哺乳動物に當嵌る所のものは今捕へたばかりの蝙蝠にも當嵌ると云ふことは之を解剖して見なくても分かるので

ある。所が歴史に於いては其の普遍なるものは既に前に謂ふ如く客觀的のものではなくして主觀的のものであり唯、皮相的に普遍なるものであると云ふに止まるのである。それで例せば三十年戰爭に就いて、それが十七世紀に行はれた宗教戰爭だと云ふことは何時でも知ることが出来るけれどももう云ふ一般的な知識は其の經過に就いて詳細な何事とも談るものではない。所で眞の科學に於いては特殊な個別なものは直接的知覺に基づくからして最も確實なものであるが、普遍的眞理は特殊な個別なものからして抽象されて始めて出來て來るものであるから、さう云ふ眞理の中には場合によつては謬つてゐても眞理とされると云ふことがあり得るのである。之に反して歴史に於いては最も普遍なるものが最も確實なるものである。即ち時代、帝王の相承、革命、戰爭と平和條約と云ふやうなものがさうなのである。然るに事件の特殊なるもの及び其の關聯の特殊なるものは一段不確實なものである。而して特殊なものとなればなる程益々不確實となるのである。是故に歴史と云ふものは實際特殊なものとなればなる程益々興味深いものとなりはするけれども然しまた益々信を措き難いものとなつて來るのである。かくて歴史は其の點で稗史と近いものとなるのである。

さて歴史が常に特殊な個別的な事實を對象とし之を専ら實在して居るものと見る限り、普遍的見地からしてあらゆる事象を考察し、特殊なるものゝ中に在つて同一に存する普遍なるものを其の對象とする所の哲學と正しく相反してゐるのである。それで哲學は特殊なるものゝ中に於いて常に普遍なるものを見、現象に於ける變化を以つて非本質的のものと認めるのである。所が歴史は常に我々に對してあるものが他のものとなると云ふことを教へるが、哲學は常に過現未に亘つて全く同一に存する實在の認識に

達せしめようとするのである。實に自然並に人生の本質は常恒に存するものであつて、それが殘る限なく認識されようとは決して深い理解を要するのである。が歴史なるものは其の深からんよりも其の長くして且、廣からんゝ點を離るものである。即ち歴史の上からいふと、現在なるものは無限の過去によつて補はれなければならぬし且、無限の將來のそれに連結せる一斷片に過れないものである。茲に哲學的頭腦を有する者と歴史的頭腦を有する者との反対が存してゐるのである。と云ふのは前者は闡明せようとするし後者はむし迄も算へようとするのである。歴史はいつれの方面に於いても同一なるものを唯、異なる形式に於いて示すに止まつてゐる。が同一なるものを一の形式若くば少數の形式中に之を認識しない人はすべての形式を通覽しても其の認識に達するときは六ヶ敷からう。民族史の章は根本に於いては唯、名と年號とが異つてゐるだけであつて、其の眞の本質的内容に至つては到る處同一であるのである。

(註) Arthur Schopenhauers Sammtliche Werke. Reclam'sche Ausgabe Bd. II. S. 515 ff.

III

シーザー・ベンハウエルが從來等闊に附せられて居た特殊なる方面に注意を拂ふに至つた所に渠の識見を見ゆるゝ事が出來る。然し歴史を以つて事實を單に並置するだけのものであるからして科學としての根本性質を缺いてゐると考へたのは歴史の本質を理解しなかつたものと云はなければならない。惟ふに歴史であつても個別的な所のものを唯、個別的なものとして取扱ふのではなくして其の間に何等かの關聯を附けるのである。それで歴史の取扱ふ所の對象は假りに一回限りの特殊なるものであるにし

ても歴史には全く系統なるものが存してゐないと云ふことは出來ない。勿論其の系統たるや他の科學のそれとは同一視することの出來ないものであるには相違ない。然し事實と事實との間に何等かの關聯が附けられてゐる以上、各の歴史は各獨特な一系統を爲してゐるものと云はれないこともない。すると歴史は單に個々單獨なるものに關する知識の聚積ではなくして個々單獨なるものゝ關聯せる系統であると云ふことが出來やう。で唯、特殊なる事實を際限なく並置したものは年代記と云ふことは出來やうけれども嚴密な意味での歴史と云ふことの出來ないものである。それでショーペンハウエルが普遍概念即ち法則を與へる學だけに科學の名義を許して特殊なる事實の關聯を明かにする歴史に對して之を拒むのは歴史の取扱ふ事實の半面を見て關聯の半面を見遁してゐるものと云はなければならぬ。

それからショーペンハウエルは歴史は個々のものを普遍から認識せずして直接に之を擱まなければならぬと云ふけれども個々の事實を直接に擱むと云ふ點に於いては何も他の科學と原理上異つた譯のものではない。何故かと云ふと他の科學であつてもいづれも直接に擱んだ所の事實を基礎としてそれから普遍に達するの他はないからである。つまり科學の謂ふ所の普遍なるものは直接に擱んだ事象に共通な關係を指して云ふに過ぎないのである。それで歴史の他の科學と異なる所は原理上事實の擱み方如何に在るのではなくして、其が直接に擱んだ一回限りの事實の間に關聯を附けるに止まつて法則に達しようとはしないだけである。さて他の科學が直接に擱んだ事實からして普遍に達した場合には其の書遍からして個々のものを認識するやうになるのは云ふ迄もないことである。然るに歴史はさう云ふ普遍に達しようとするものではないのであるからして歴史の場合に於いては個々のものをば普遍からして

認論せようとするものでないのは明かである。其處に歴史と他の科學との反對が存してゐるのである。さりとて歴史を以つて科學でないとする譯には行かない。何故かと云ふと所謂自然科學的性質の學でなければ科學でないと云ふ十分な理由がないからである。それからショーベンハウエルは歴史と云ふものは個々單獨なるものをば限りなく搔き集めなければならぬものゝやうに考へてゐるのであるが、若し假りに歴史がさう云ふ性質のものであるとする、個々單獨なるものをば餘計に集め得たものが上乗の歴史となる譯である。が今日の歴史は果してさう云ふ性質のものであらうか。何人も否と答へるに躊躇しないであらう。ヴィンデルバントやリツカートは歴史に於いては人道とか（註、一）文化（註、二）とか云ふ標準があつて特殊の事實の間に選擇が施されなければならないものであると考へてゐるのであるが、事實上歴史に於いては特殊事實の間に何等かの選擇が施されてゐると云ふことは否むことが出来ない。兎に角歴史はショーベンハウエルの考へたやうに唯、限りなく算へるのが其の職能ではなくして何等かの價值を有する個々單獨な事實を探つて其の關聯を需めるのである、されば歴史に於いても渠が哲學に就いて缺く可からざるものと考へたと同じ深い理解が缺けてはならない。要するにショーベンハウエルは歴史の本質を正しく理解してゐたものと云ふことは出來ない。けれども歴史に於いて其の個々單獨なるものの方面に着眼したのは確に歴史の認識論的考察の上に一轉期を劃したものと云へよう。

Windelband, Geschichtsphilosophie. S. 56 其の Einleitung in die Philosophie. S. 239 云ふ如き人の歴史の構成する事は文化的の歴史である。

(III, 11) Kickert, Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft. 4te und 5te Aufl. S. 89-118.

四

ショーベンハウエルの歴史は個々單獨なるものを摠むに在つて 普遍を理解せようとするものではないと云ふ大體の見地に立つてゐるのはヴィンデルバントである。

が渠はショーベンハウエルのやうに歴史を以つて科學であると見ることに反対はしてゐない。何故かと云ふと、ヴィンデルバントは歴史なるものは自然科學とは其の方法を異にしてはゐるが、やはり經驗科學に屬すべきものであるこ考へたからである。がヴィンデルバントも歴史に於いては過去の事件を其の全體的個別的の形で新に生かして來なければならぬのであるからして、其の點に於いて史的創造と美的創造とは似てゐる。歴史と文學とは似てゐると云つてゐる所から見ると、ショーベンハウエルの考と近い考へを懷いてゐることが分かる。ヴィンデルバントは先づ現實の認識に關する學は通常自然科學と精神科學とに分けられてゐるが其の分類は不合理なる所以を論じて論歩を進めてゐる。其の論ずる所はかうである(註)。

自然科學と精神科學の分類の基づいてゐる自然と精神と云ふ區別は古くからして行はれてゐるものではあるが最近の哲學の氣分、認識論的批判の結果を考へると、この區別は確實にして自明のものであるとは認められない。其の上自然と精神と云ふ對象上の反對は認識の方法の反対と一致するものではない。何故かと云ふと、心理學なるものは其の對象から見ると精神科學に屬するものとするの他はないし且、ある意味から云ふと精神科學の基礎だとも考へられるのであるが、然し其の探る所の研究方法は全く自然科學的のものであるからである。所でさう云ふ困難が起つて來るやうな分類は系統的のものと

は見られない。それでは心理學の探る所の方法と自然科學の探る所の方法とがどう云ふ所に於いて似寄つてゐるかと云ふと、つまり心理學も自然科學と同じやうに其の事實を確定し蒐集し加工して、それからして事實の從ふべき普遍的合法性を理解せようとするのである。勿論心理學の對象と自然科學の對象とは其の性質を異にしてゐるのであるから、事實確定の方法、歸納的手續の工合、見出された法則の採用の形勢と云ふやうなものは非常に異つてゐるに相違ない。けれども其の認識目的は同一であるのである。即ち法則に達しようとするに在るのである。所が歴史科學と呼ばれる所のものは一回限りの現實な個々の事件をば十分に描寫せようと云ふ目的を有して居るのである。尤も歴史科學なるものは種々の學を包含してゐるのであるからして其の對象も雑多であり對象を理解する手段も非常に雑多であるには相違ない。けれども其の認識目的は一回限りの現實に現はれた人間生活の構成した所のものをば其の儘に再生し理解せようと云ふに在るのである。茲に純粹方法論的であつて且、確實な論理的概念の基礎の上に立つてゐる經驗科學の分類が存してゐるのである。で科學分類の原理は其の認識目的の形式的性質に存すると云ふべきである。即ち一は普遍的法則を覗め一は特殊な事實を覗めるのである。之を形式論理學の言葉で言ひ表すと、一方の科學の目的是全稱的必然的判斷であるが、一方の科學の目的是單稱的實然的命題である。この區別は人間悟性に於ける最も大切にして的確な關係たる普遍と特殊との關係と關聯してゐるのである。かくて經驗科學は現實を認識するに方つて或は自然法の形勢に於ける普遍を覗め或は歴史的に確立せられたる形勢に於ける特殊を覗めるのである。で經驗科學は一部に於いては現實なる事件の變らざる形勢を考察し一部に於いては現實なる事件

の一回限りの内容を考察するのである。一が法則科學である、一が事件科學であるのである。一は常恒に存する所のものに就いて數へ一は一回限りの過往去れる所のものに就いて數へるのである。新しい言葉で之を表現することが許されるならば一は法則を立てるもの、nomothetic であり一は特殊を描寫するもの idiographic である。^{ノモ}ノムである。是れ普通に云ふ所の自然科學と歴史科學との反對を表すものと謂ふべきものが出来る。尤もこの場合に於いては心理學なるものの全く自然科學の中に數へらるゝものは云ふ迄もない」とある。さてこの方法論的反對は知識其物の取扱方に關する分類であつて其の内容上の分類ではなし。ノモノム的ではならぬ。それで同じ對象であつても或は nomothetic な研究の對象となり或は idiographic な研究の對象となることが出来るし、事實の上に於いてもかうなつてゐるのである。是れは常に等しいものも一回限りのものとの反對はある點に於いて相對的なるのであると言ふことを關聯してゐるのである。それで非常に長い期間直接に認められるやうな變化を受けない所からして nomothetic に取扱つて差支のないものであつても、一層廣い見地に立つて之れを見るとき一定の時の間效力を有する一回限りのものたるものが出来るのである。かくて例せば特殊の言語なるものは其の表現は變つても變らずに存する所の形式的法則によつて支配されてゐるのである。所が一方に於いてはそれが人間の一般言語生活に於ける一回限りの現象たるに過ぎないのである。それと同じ事が生理學に就いても地質學に就いても或る意味に於いては天文學に就いても云はれ得るのである。從つて歴史的原理なるものは自然科學の範圍にまでも推し及ぼされるのである。此の模範的な例は生物の學である。生物の學なるものが系統學として數千年間變化せずには存するものと從來

觀察せられた生活體の型をば其の合法的形式であるとして考察する限りに於いては nomothetic な性質のものであるのであるが、然し進化史として地上の有機體の全系列をば時の経過中に漸次に發生した過程であるとし或は漸次に變化し來つた過程であるとして之を描寫すれば idiographisch のものとなるのである。

所下自然科學にしても歴史にても經驗科學と云ふ性質は共通に有して居るのであるからして、兩者とも其の出發點として—論理的に之を云ふと其の證明の前提として—經驗即ち知覺上の事實を有するのである。然し其の經驗なるものは素朴なる人々の通常有つてゐる儘のもので満足することが出來ないのであるからして、科學の基礎たる經驗は科學的に淨化され批判的に検討せられたものでなければならぬのである。さう云ふ點に於いては自然科學も歴史も互に一致するが、其の經驗上の事實を利用する仕方になると兩者互に異つて來るのである。と云ふのは一方は法則を覗めるのであるが、一方は成形ニカルナンを覗めるのである。即ち一方では思惟なるものは特殊なるものゝ確定からして其の體に存する普遍の關係を理解せようとして進んで行くけれども、一方では特殊なるものゝ成形に止まるのである。自然研究者に取つては觀察された個々の事象は其れ自體に於いては何等科學的價値を有するものではない。がそれが類概念の特殊の例として見ることの出來られる限り唯、價値を有するのである。で自然科學者は個々の事象に於いて單に合法的普遍性を見るに適はしい性質だけを考察するのである。所が歴史家となると過去の事件をば特殊な全體として生かして來やうとするのである。それで自然科學的思惟に於いては抽象の傾向が主となると云ふ結果となるのである。

ある。さて役に立つと云ふ點から考へて見ると、どちらの思惟の方向も同じことであると云へる。と云ふのは普遍的法則を知れば未來の状態を豫知し目的に適ふやうにそれに干渉することが出来ると云ふ實際的價値があるし、又、歴史上の知識は共同的人間生活に於けるあらゆる目的活動の指導となるからである。一體人間と云ふものは歴史を有する動物であつて、其の文化生活なるものはつまり時代から時代へと凝聚した歴史的關聯であるのである。で何人でもこの關聯の中に入らうと思ふ者は其の發展を理解しなければならないのである。がさう云ふ役に立つと云ふことは別として對象の認識價値に於ける客觀的な純粹理論的な差別が問題となりるのである。惟ふに特殊なるものは一層普遍的な建物の礎とならないならば唯、無用な珍らしいものと云ふに止まるのである。それで科學的の意味に於いては事實と云ふものは既に目的論的概念であるのである。即ち科學に取つては何でも現實なものならば事實であるのではなくして、科學がそれから何事かを學ぶことの出來られるものだけが事實なのであるのである。殊に歴史に於いてさうである。で世には歴史的事實でない事件が澤山ある。例せばギヨーテが一千七百八十年に戸口の鐘と部屋の鍵と一月二十二日に名刺筐とを作らせたと云ふことは確實な事實ではあるが、然しこれは歴史上の事實でもなければ文學史上的事實でも又、傳記上の事實でもないのである。然し觀察せられた事實若くば傳來の事實に對して眞に事實たるの價値が屬してゐるかどうかはある範圍内に於いては前以つて決めることが出來ないのであるからして、科學が开を開分ければならない。が然し特殊な知識をば大なる全體の中に接排せようと云ふ目的は特殊なるものをば歸納的に普遍概念若くば普遍的判斷の下に從屬せしめる場合だけに限ざられずして、それがすべて個別的特徴の失はれざる。

總體の直觀(人生)の大切な要素として安排される場合に於いても達せられるのである。所が從來普遍の一方面だけに重きが置かれて特殊の一方面が忘れられてゐたのである。實證論者の所謂歴史哲學なるものゝ主張したやうに歴史を以つて自然科學とすると云ふ場合に於いてはさうなつて來るのである。が歸納によつて民族生活の法則を引出さうとした所で少數の役に立たない一般的な法則を生ずるに過ぎない。所で人間の興味評價は個別的な一回限りのものに關係するものであつて、對象がいくつでもあると云ふやうなものに對すると其の感情は鈍つて了うのである。けれども *idiographisch* な科學であつてもそれが學として進んで行くと云ふには普遍的法則を要するのである。而して其の普遍的法則を打建てるのは *nomothetic* な學に他ならぬのである。蓋し歴史的過程の因果の説明なるものは事象一般の経過の普遍的觀念を豫想するものであるのである。而して歴史的證明をば全く論理的形式のものにして見ること、其の證明の大前提たるものは現象の自然法則である。殊に心的現象の自然法則である。人間が一般に如何に考へ如何に感じ如何に意志するかに就いて少しも考へを有つてゐない者は個別的な事件を擱んで其の認識に達することが出來なからう。否事實を批判的に確定することすら出來なからう。が然しかう云ふ場合に於いて歴史科學の心理學に對する要求は太したものではないのである。と云ふのは從來心的生活の法則として與へられてゐる所のものは非常に不完全なものであつたのであるけれどもそれが決して歴史家の妨げとはならなかつたのである。即ち歴史家は自然的な人性の知識、機知、天才的直觀によつて人物とその行為とを理解することを十分に知つてゐるのである。是に由つて觀る。と科學的心理學の要素的な心的過程の數學的自然法則的説明と云ふやうなものが現實な人間生活の理

解に取つてそれだけの效果のあるものであるか疑問である。

以上述べた人間の知識の二つの要素は共同の源泉に還元することの出来ないものである。けれども個別の現象の因果的説明はそれが普遍的法則に還元せられる所からして現實な現象の歴史的な特殊な成形も其の終極に於いては事象の自然合法性からして理解することが可能でなければならぬと云ふ思想が起つて來もするけれども、然しこれが不可能であると云ふことは單純な論理的圖式に於いて明かならしめることが出来る。蓋し因果考察に於いて各特殊な現象は二段論法の形式を取るのであるが、其の大前提たるものは自然法則であり、其の小前提たるものは時間的に與へられ條件であり、而して其の結論たるものは現實なる個々の事件であるのである。が論理上結論なるものは一つの前提を豫想すると同じやうに事件なるものは二種の原因を豫想するのである。即ち一方に於いては事象の永遠の本質の表現せられる時間を超越する所の必然性と、一方では一定の時間内に起る所の特殊の條件とである。例えば爆發の原因是 nonethetisch な意味では化學的物理的性質として言表される爆發物の性質であるが、die graphisch な意味では個々の運動、火花、振盪の如きものである。而してこの兩者が結び付いて事件を生ずるのである。けれども其のいづれも一方から出て來たものではないのである。而して其の結合は兩者其物の中に基いてゐるのではない。つまり三段論法に於いて小前提が大前提から出て來たものでないのと同じやうに、事件に於いても其の普遍的本質に加はる所の條件なるものは、法則的本質其物からして引き出されないものである。寧ろ其の條件はそれ自體時間的事件として他の時間的事件からして法則的必然性によつて出て來たものである。而して其の事件はまた他の事件に基くと云ふやうに

どこ迄も進んで行くのである。かう云ふ無限の系列の發端は概念的には考へられない。而してそれを表象しようとしても其の發端は常に事象の普遍的本質に附加つたものであつて、それから出て來たものではないのである。之を今日の科學の言葉で云ふと、普遍的自然法則からして、直接それに先つものを豫想して始めて現在の世界狀態が出て來るのである。而して直接普遍的自然法則に先つものは其前のものは豫想すると云ふやうにどこ迄も進んで行くのである。けれども原子の一定の特殊な成層狀態なるものは普遍的運動の法則其物からしては出て來るものではない。世界法式からして一定の時に於ける特殊性なるものは直接に展開され得ない。従つて因果の法則の下にあらゆるものを包攝したからと云つて、時の中に與へられた特殊なるものを其の最後の基礎まで分析することにはならぬ、それであらゆる歴史的個別的に經驗されるものに於いては我々に取つて理解することの出來ない剩餘が殘るのである。即ち何とも名狀することは出來ない、定義することの出來ないあるものが殘るのである。かくて人格の最も内的な最後の本質は普遍的範疇によれる分析を容さないのである。而してこの理解することの出來ないものが我々の意識には我々の本質の無原因性として現はれるのである。即ち個人的自由の無原因性として現はれるのである。形而上學的概念及び問題の多くは此處から起つて來るのである。時の中に與へられたもののすべては普遍的合法性の外に存してゐて他のものからしては導き出すことの出來ない獨立なものとして現はれるのである。而して世界現象の内容なるものは其の形式からしては理解するとの出來ないのである。それで特殊をば普遍から、多をば一から、有限のものをば無限なるものから、存在をば本質から概念的に導き出すと云ふあらゆる試みは成功しなかつのである。哲學的世

界説明の大系統はこの罅隙を蓋はうとしたけれども之を充あいことが出来なかつた。兎に角法則と事件とは吾々の世界表象の最後の潤るんとの出來なら二つの量であつて、相並んで存してゐるのである。此處に科學的思惟が解決の不可能なるを明かに意識して單に問題を確定し疑問を提出し得る限界點が存してゐるのである。

（註） Windelband, Präudien. Bd. II. S. 42. ff.

Windelband, Einleitung in die Philosophie. S. 238-243

五

ヴァキンデルバントの歴史に關する思想はリッカートに於いて論理的に推進められて其の歴史科學の理論となつてゐる。それで別々に批判するの煩を避けて直ちにリッカートの思想の叙述に移らう。

れてリッカートの考に據る（註）科學とは云ふのはそが取扱ふ所の對象と、そが適用する所の方法とに就いて互に區別され得るものであるからして、形式的見地と實質的見地との下に分類せらるべきであるけれどもこの二つの分類原理は畢竟一に歸するものであると云ふことは餘り諂ひられてはゐない。今日一般の分類に於いては實質的分類原理として自然と精神と云ふ概念が基礎となつてゐる 而して自然と云ふのは物的のもの、精神と云ふのは心的のものと解されてゐるのである。所で物的世界に對する心的生活と云ふ内容上の 差別からして同時にまた一一の方法の形式上の 差別が導き出されるのであるけれども物と心と云ふやうな實在に就いての對象の區別は特殊科學の區別には見出さうとが出來ない。何故かと言ふて、少なくも直接に知ることの出来る現實に於いて自然科學の採る所の研究方法であつて原

理上行はれ得ないものはありはしないからである。それで現實なるものは全體として、即ちあらゆる物的及び心的存として同一の方法で以つて研究され得るのである。して見るを物的世界、心的生活を云ふやうな實質上の區別からして特殊科學を分類することは出来ないことになるのである。従つて特殊科學の分類の基礎となるべき對象の實質上の反對は自然と文化と云ふ二つの概念に覗めるの他はない。この二つの概念に基いて科學を分類すると、特殊研究家の興味の反對をば最もよく表示することが出来られるのである。所で科學をば自然科學と文化科學とに分類するのは唯實質的原理の上からだけではなくして、其の上に形式的分類原理が附加はつて來なければならぬ。而してそれによつてこの二つの概念が普通理解せられてゐるよりも一層複雑なものとなつて來なければならぬ。と云ふのは自然と云ふ概念が唯、物的世界を意味するだけではなくして、普遍的法則によつて規定せられるものと云ふ形式的論理的意味を得て來ることになると、其の特殊性に於ける一回限りの現象と云ふ最も廣い形式的意味での歴史の概念と形式的反対に立つことになるのである。其所で實質の上から云ふと、自然と文化とは反対を爲し、形式の上から云ふと、自然科學的方法と歴史的方法とは反対を爲すと云ふことになるのである。さて自然と文化と云ふ二つの概念であるが、自然と云ふのは自から成立ち自から成長する體になつてゐるすべての物を指して之を云ひ、文化と云ふのは目的行動を爲す所の人間が直接に作り出したものの若くは有意的に手を加へたものを指して之を云ふのであるからして、自から成立ち自から成長する體になつてゐるものは價值とは何等關係なしに考察せられ得るものであるけれども、文化の事物には價值がもつ付いてゐるのである。それで自然の過程は價值としては考へられないものである。従つて文化の

對象であつても價値を去つて了へばまた單なる自然となるのである。それで我々は價値に關係するの如何によつて確に對象の二種類を區別することが出來られるのである。而してどんな文化過程であつてもそれにしつ付いてゐる價値を離れると、自然と關聯したもの、従つて自然として考へられなければならぬものとなつて來るのである。所で文化價値と云ふものは何人によつても效力のあるものと考へられるものであつて、唯、衝動的に評價され追求されるものではないのである。

若し自然科學と文化科學との區別が自然と文化と云ふ對象上の差別に止つて常に同一方法で研究されるものであるとしたならば、論理上あまり意味のないことにならうけれども、兩者の間には別の深い差別が存してゐるのである。今之を示さうと云ふには形式的分類原理に就いて述べなければならない。さて自然科學的方法なるものに於いては、其の目的とする所は普遍概念即ち法則に達せようと云ふのであるからして、事象及び過程に於いて共通なものが本質的なものと考へられ、全く個別的な一回限りのものは非本質的なものとして捨てられて了ふのである。所が現實なものは特殊的なもの個別的なものであつて、決して共通の要素から成立つてゐるものではないのであるからして、其所で概念の内容と現實との間に間隙が出來て來ることになるのである。然しかう云ふと自然科學の結果を現實に應用すると云ふことが不思議な事のやうに思はれやうけれども、自然科學の結果と現實に應用すると云つたからとて、それが決して個別的なもの特殊的なものに及ぶのではない。で我々が自然法則に従つて豫言するので、その出來るのは唯、現實に於ける普遍なものに就いてだけである。而してそれによつて我々の態度を定めて行くのである。で世界が若し普遍化せられ單純化されないならばそれを計算し支配することは出來

ない譯である。個別的な特殊的なもの、限りなき雜多は普遍化する所の概念形成によつて征服されなければ我々をして困惑せしめて了ふに相違ない。とにかく自然科學的方法なるものは普遍化する所のものであるのである。之に反して歴史なるものは特殊的なもの個別的なものに就いて現實を取扱ふのであるからして、自然科學的方法の普遍化するに對して歴史的方法なるものは個別化するものであると云ふことが出来るのである。

所で歴史なるものは一回限りの特殊的な個別的なものを描寫するのが其の目的であるとするところが如何にして科學として可能であるかと云ふ疑問が起つて來るのであるが、さてこの疑問は歴史的概念形成の疑問と云ふことが出来るのである。何故かと云ふと、我々が概念と云ふ場合には現實の科學的本質的要素の概括と云ふ廣い意味に之を用ゐるからである。概念なる語をさう云ふ廣い意味に用ひて差支ないと云ふことは、概念を形成すると云ふこと普遍化すると云ふことは一致するものでないと云ふことが分かれば了解せられるのである。そこで特殊的な個別的なものゝ内容となつて居る所の概念の指導原理を見出すと云ふことが問題となつて來るのである。而してこの疑問に答へれば歴史科學の形式的性質ばかりでなく結局自然科學と文化科學との實質的區分の正當なること分かつて來るのである。さて何等の價值もくつ附いてゐない、従つて單なる自然として考察せられる現實に於いては大抵の場合、唯、論理的な意味での自然科學的興味が存してゐるだけである。それでさう云ふ場合に於いては個々の事象は其の特殊性に就いて問題となるのではなくして通常單にいくらか普遍的な概念に對する見本として問題となるだけである。所が文化過程に就いてはさうではないのである。と云ふのは我々の興味は特殊

的な個別的なものに向ひ、其の一回限りの経過に向ふのである。従つて我々はそれを歴史的に個別化して知らうとするのである。これで特殊科學の方法の實質的原理と形式的原理との最も普遍な關聯が出來た舞であるし、而してまた其の關聯の根據は容易に理解せられるのである。即ち一對象の文化的意味はそれが全體として考察される所に在つて、他と共通に有する所のものによるのではない。否、正しく他と區別される所によるのである。それで我々が文化價値に關係して考察する所の現實なるものは特殊的、個別的なものとして考へられなければならないのである。實に一過程の文化的意味は其の文化價値が個別的なものと専ら結び付いて居れば居る程屢増して來るのである。それで文化過程であつて、其の文化價値としての意味が問題となる場合には唯、個別的な歴史的取扱がそれに適應するのである。が然しそれが自然として見られると、換言すると、それが普遍概念即ち法則の下に入れられることになると、文化過程は價値を離れた類の見本となつて了ひ、其の類の中の他のものを取換へられ得るものとなるのである。かくて自然科學的な普遍的な取扱だけでは我々を満足させないことになるのである。文化生活をば自然科學的に叙述すると云ふことはよし正しいことであるにしても唯一のものとしては不十分である。そこで文化の概念からして科學としての歴史が可能になつて來るのである。即ち文化の概念からしてどうしても個別化する所の概念形成が起つて來なければならぬことになるのである。それで文化と云ふ概念によつて、科學的に描寫することの出來ない單なる異質性からして描寫することの出来る個別性が出て來るのである。即ち文化と云ふ概念が現實をば歴史科學に取つて本質的なものと非本質的なもの、換言すると、歴史的に大切な個別的なものと單に異質的なものを別つのである。而して單に異質

的なものは現實其物と一致するものであつて、科學の對象とはならないものである。然るに個別的なものは現實の一定の理解であつて、概念の中に入る所のものであるのである。歴史家なるものは限りなく多くからして文化發展に取つて意義のあるものを選り出すのである。かくて歴史的概念形成には文化と云ふ概念が本質的なものを選り出す原理となるのである。それは丁度自然科學に取つて普遍の上から見られた現實としての自然と云ふ概念が其の選擇原理となるのと同様である。文化にくつ付いてゐる價値により而して又、價値に關係してゐる所からして描寫することの出来る歴史的個別性と云ふ概念が始めて構成せられるのである。

所が價値の見地と云ふものは特殊科學からは除いて了はなければならぬものだと云ふやうな獨斷的見解が廣く擴つてゐるのであるが、さう云ふ見解に従ふと云ふと、特殊科學に於いては現實に存する所のものに限らるべきものである。従つて事象の價値如何と云ふやうなことは歴史家の關する所ではないと云ふのである。ある意味に於いては全くその通りである。歴史家は事象の價値あるものであるかどうかを決定するのではなくして、現實にあつた所のものを描寫すればよいのである。何故かと云ふと、歴史家は理論家であつて實際家ではないからである。然し是れは歴史なるものは價値を取扱ふものだと云ふことと矛盾するものではないのである。蓋し歴史が價値を考察するのは唯、それが事實上主觀によつて評價せられる、従つて事實上ある對象が財寶として考へられると云ふ點に於いてである。で歴史は價値を取扱ふと云つた所で、評價する科學であるのではないのである。で歴史に於ける價値關係は事實確定の範圍に止まるものであつて、實際的評價ではないのである。で若し歴史なるものが毀譽褒貶

レアレスザイン

の批判を下すと云ふやうな場合に於いては實在の科學としての範圍を超えるものと云はなければならぬ。

以上述べたやうに歴史に於いては價値關係なるものは唯、事實の選擇に關するものであるからして、價値の見地に於ける考察をば目的論的考察と云ふ時には誤解を起させる虞がある。何故かと云ふと目的論的考察と云ふと、現實に對する因果的見解と衝突するかの如く考へられると云ふやうなことがあるからである。蓋し個別化する價値に關係する歴史であつてもやはり一回限りの個別的過程の間に存する因果的關聯を研究しなければならない。而して個別的な因果關聯の描寫には歴史的概念の要素として普遍的概念も必要ではあるが、さりとて歴史に於ける因果的關聯と普遍的自然法則とは同一のものではないのである。それで歴史に於ける目的論的考察と云ふのは、歴史に於ける本質的なもの、選擇の方法論的原理が價値に依屬して居り、而して又原因の疑問に於いて文化財寶の實現に取つて大切な原因だけが考察せられる限り價値に依屬してゐると云ふに在るのである。でかう云ふ目的論なるものは因果と少しも反対するものではないのである。さて其の價値であるが、それは歴史家の勝手な價値であつてはならない。どうしてもあらゆる者によつて效力あるものとして認めらるゝ所の普遍的な文化價値でなければならない。文化價値の客觀性の基づく所は文化價値なるものがさう云ふ普遍性を有する所に在るのである。それで歴史に於いて描寫せられる所の特殊的な個別的なものは只の特殊的な個別的なものではなくしてそれと同時に普遍的意味を有つたものでなければならない。従つて歴史なるものは個々の事實の單なる叙述より成るものではないのである。で歴史に於いても自然科學に於けると同じやうに特殊なるもの

が普遍なるもの、下に從屬せしめられるのである。けれどもそれにも係はらず自然科學の普遍化する手續と歴史の特殊化する手續との反対はやはり存するのである。と云ふのは歴史的に普遍なるものは特殊なるものがその唯、一つの場合たるに過れない普遍概念即ち自然法則ではなくして、文化價值であるのである。而して文化價值なるものは唯、一回限りの個別的なものに於いてのみ漸次に發展し得る所のものである。而して文化價值なるものには唯、一回限りの個別的なものに於いてのみ漸次に發展し得る所のものである。それで個別的現實をば普遍的價值に關係したからと云つて、それで普遍概念の見本とはならずして、其の個別性に於いて意味あるものとして殘るのである。要するに經驗科學には一方には自然科學があり、一方には歴史的文化科學があるのであるが、自然科學の自然と云ふ語は其の科學の對象並に方法の性質を同時に表はしてゐる。即ち自然なるものは價値關係を離れ且、普遍化的に解された現實である。然るに一方には自然なるものに對應する所の語が缺けてゐる。それで自然なるものの有つてゐる二つの意味に對應する所の二つの語を擇ばなければならない。文化と歴史が即ちそれがである。而文化科學としては普遍的文化價值に關係してゐる對象を取扱ひ歴史科學としては其の對象の特殊性、個別性に於ける發展を描寫するのである。

(註) Rickert, Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft. 4te und 5te Aufl. S. 12-118.

Rickert, Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung. 2te Aufl. S. 119-504

六

以上述べたやうにヴィンデルバントやリッカートは經驗科學の區別を以つて對象に在ると言ふよりも寧ろ之を考察の方法に求めたのである。かかる云ふ見地に對してミュンスターベルヒは今一つの見地

が可能であると云ふことを主張してゐるのである(註、一)。

ミニンスター・ベルヒの考によると、物心の世界が認識論上原始的な現實的自我と實際關聯してゐると云ふ點から考察されもすれば又さう云ふ自我を放れたものとしても考察され得るのである。而して其の反對に實質的でもなければ方法論的であるのでもなく、本體論的のものであらう。が然しそして經驗科學なるものは知覺することの出来る現實だけを認識せようとするものであるとすればこの見地は成立たないことになるのであるけれども、さう云ふ主觀機能が、論理上原始的なものとして、其の目的論的關係の内的統一の中に存してゐるを云ふことは自己省察によつて分かるのである。而して其の現實價値は、それを心理的主觀に取つて知覺された經驗に過ぎない所の心理的過程であるとして考へる時には失はれ了ふのである。で吾々が心理的過程とは一回限りのものとして叙述せようと合法的のものとして説明せようと變りはないのである。かう云ふ見解が正しいものであるとすると精神科學は叙述を爲すべきでないと云ふことになるのである。何故か云ふと叙述と云へば獨立してゐる對象を豫想するからである。所が精神科學と云ふ主觀化する所のものは唯、理解し評價するだけである。之に反して客觀化する科學たる心理學や自然科學と云ふものは、對象と考へられる限り普遍なものばかりではなく又、一回限りのものでも之を取扱ふのである。が精神科學はまた其の對象の主觀化的に考察せられる限り一回限りのものであつても又、普遍なものであつても等しく取扱ふのである。

それから叙述と説明とは實際分つことは出來ないし、法則と事件とは反對を爲してゐるものでは無い。蓋し事件が知覺されるとき對象の世界に於ける過程と考へられる限りはもううである。一體叙述なるも

のが論理的價値を得るやうになるのは、それが關聯を示す所に在るのである。それで吾々は何時でも何等かの共同表象に基いて居る所の概念で以つて過程を記述するのである而して其の中に入り来る所の判斷が法則の性質を有つやうになればそれに従つて科學上一段價値あるものとなつて來るのである。従つて歴史と自然科學との區別は前者が過程を叙述し後者が之を法則的に解するに在るのではない。何故かと云ふと、叙述すると云へば、法則をそれに作り上げやうとするに他ならぬからである。上述の見解に對して、我々は實際生活に於いては過程をば上位の概念を使はずして叙述することが出来るし、又、詩人や歴史家も同じやうに過程を叙述することが出来ると云ふ所からして反対が起つて來るのである。蓋し感情を描寫したり風景を描寫したりする所の詩人は心理學的關聯若くは自然科學的關聯を表すことを目的とするものではないのである。さう云ふ意味からして科學的心理學に對して藝術的心理學を對立させようとしたものがあるけれども、それには二様の點に注意すべきである。第一に其の場合に於いては客觀的描寫が叙述の終極目的ではなくして、叙述其物が唯、主觀化的考察の補助手段に過ぎないと言ふことである。それから第二に傳達すると云ふことがすべて叙述すると云ふことではないと云ふことである。小供の笑や泣聲は我々に子供の心情の狀態を知らしめるけれども、叙述ではないのである。又、詩人や歴史家が言葉の上で泣たり笑つたりして心の調子を我々に傳へるけれども、さう云ふ場合には法則も概念も必要ではないのである。がさう云ふものは叙述とは何の關係もないものである、即ち其の要素を明かにして過程を規定することは何の關係もないものである。それで個別的なものが實際叙述されると云ふ場合には概念も法則も又、關聯を付けると云ふことも缺けてはならないのである。是れは歴史

家の場合であつても同じことである。ヴァンデルバントやリッカートは個別的なものに於てのみ雑多な十分な現實が與へられる思考があるのであるからして歴史家は原始的現實性を取扱ふのであるが、個別的なものを法則の見地の下に考察する自然研究者及び心理學者は抽象の世界に活動するものと云ふことになるのである。然しかう云ふ反對は個別的過程と法則と云ふ反對とは關係はないのである。何故かと云ふと、客觀化された個別的なものは既に普遍的なるものと同じく非現實的なものであるし、而して又、法則によつて概念的に規定されたものは直接に直觀されたものに劣らず雑多であるからである。所が歴史は目的を定め手段を考へて活動する、意志する人格の眞の生活のやうに談るのであるが、客觀化する所の科學はさう云ふ生きてゐる生命を取去つて單なる過程として了ふのである。それから直觀は限りなき雑多を與へるけれども概念は單純化するものであるからして、概念を以つて雑多を描寫することが出来ないと言ふものがある。けれどもこれには同意するこゝが出來ない、成程個々の概念は抽象するには相違ないけれども、命題となると、また之を再建することが出來られるのである。蓋し直觀上の雑多なるものは區別され得る雑多であるのであるからして、科學的に規定されなければならぬものである。直觀によるよりも概念的に區別する方が區別がよく出来るのである。さて法則と云ふものの本質からして同じ經驗的條件が與へられると、如何なる場所に於いても又、如何なる時に於いても同じ過程の行はあるべきことを要求することになるのであるが、其の關係は經驗的條件が特殊化されたにしても同じことである。科學は抽象的になればなる程法則實現の條件は普遍化されて來るには相違ないが、然し法則の效力は其の條件が經驗世界に於いて反覆を許さぬ程特殊化されたにしても原理上同じく普遍的のもので

あるのである。かう云ふ意味に於いて我々の太陽系統、地球、吾々の社會の發展が客觀化せられた過程として考へられた時には全く法則の科學に屬するのである。が我々が之を主觀化して説明する場合に始めて歴史となるのである。即ち社會をば自由な主觀の結果と解し天地をば宗教哲學的に説明して始めて歴史となる。それで一回限りの過程と普遍的過程、事件と法則と云ふものは反對を爲すものではなくして法則と自由、客觀と主觀とが反對を爲してゐるのである。客觀的過程なるものは、よしそれが一回限りの事件と考へられるにしても、また常に反覆する事件であると考へられるにしても、原始的現實性を有してゐるものではない。何故かと云ふと、主觀からして解放されてゐるからである。尙、一步を進めて事象の原始的現實性は全く統一として體験せられると云へる。それで事象に於ける雜多なるものは第二義的に解されたものであつて客觀化の途中に在るものである。要するに現實は雜多であるのではなくして、我々が現實を捨て、其れ自から法則の支配を受くべき雜多を創造することによつて始めて雜多となるのである。

、ヴィキンデルバントは一回限りのものゝ中に價値は横つてゐる。スピノザのやうに普遍の認識に沈潛する人は感情を失ふと云つてゐるが、價値と云ふものをば現實的な自我の關係に存する價値と解するならば、一回限りのものにも法則と同じく價値は存するものではない。何故かと云ふと主觀との關係が除去せられるからである。けれども價値あるものを心理的感情過程と解するならば、どちらにも價値は存してゐるのである。が價値の問題をば心理學的意味ではなくして之を哲學的に解するならば、主觀化及び客觀化の區別の原理其物と同じものとなるのである。それで主觀化すると云ふことは、主觀との關係に

於いて現實を考へることである。従つて價値を置くと云ふことである。客觀化する場合にはそれとは反對になるのである。従つて價値を離れると云ふことになるのである。所で歴史なるものはどう云ふものであるかと云ふと、對象に關するものではなくして、主觀の行爲に關する所のものである。即ち意志に關する所のものである(註二)。一體人間と云ふものは意欲する主觀としては評價するけれども、物心的對象としては價値を離れた世界に價値とは關係なしに立つてゐるのである。それで對象としての人間には其の行爲の動機なるものは原因として勘定されなければならぬけれども、意欲する主觀としての人間には意志が目的を達せんとして努力するのである。而して其の意志の關聯を明かにせようと云ふのが歴史の任務である。それで歴史に於いては因果關聯と云ふものが問題となるべきものではないのである。で若し因果關聯が問題となると云ふやうな場合に於いては、歴史的興味に歴史以外の興味が代つたものと云はなければならぬ。即ち自然主義的心理學的興味がこれに代つたものと云はなければならぬ。従つて歴史に於いては意志の原因を尋ねると云ふやうなことは無意味の事であるのである。で歴史の問ふ所は單に意味、目的、意志の內的關聯の疑問に止まるのである。この故に歴史の世界は眞に自由の世界であるのである。けれども歴史の世界に於いて客觀的事象が消え失せて了解ではない。がそれが問題となるのは唯、其の本來の實在性に於いてである。即ち意志の手段及び目的としてである。例せば茲に二國があつて滿洲を爭ふとする、其の滿洲なるものは地理學者の記述する滿洲ではなくして、經濟的及び政治的膨脹の手段であるのである。それから事象の因果關聯と云ふものも物的過程として歴史の世界に入つて來るものではなくして、人間の興味、人間の知識、人間の計算の對象とし

で入つて來るのである。而して自然が地震や洪水によつて文明を亡むに關するうなじみがあるもあるといふ。それがふの場合に於いても歴史家の記述するのは何時でも意欲の内容だけである。地震や洪水が自然の過程其物として歴史の中に入つて來るのではなくして恐怖せられたるもの若くば活動を止め丁度ものとして歴史の中に入つて來るのである。勿論歴史家が意志する人間の手段や目的を叙述せようとする場合には、屢々自然學者の概念的系統を利用するといふことはあることではあるけれども、然しそれが歴史の範圍に入るやうになるのは唯、意志に關係して説明せらるる場合だけに限られるのである。シーサーの乗つた小舟は造船家の見地からして叙述するゝのも出來やうけれども、其の歴史的の意味は唯、それが水を渡らうむにシーサーの意志を満足せらるゝことが出來たところに存してゐるのである。惟ふに歴史と自然科學とは決して撞突するものではない何故かといふと各異つた次元の中に動いてゐるものであるからである。で自然科學的な解答を與へたからといふて決して眞に歴史的な疑問の解答たるゝものは出來ないのである。是れ事象の關係を斷定したからといふて、執意の關係に對する要求を満足されんとしたが出來ないにによるのである(註¹¹¹)といふのである。

(註¹¹) Münsterberg, Grundzüge der Psychologie. S. 33-65

(註¹¹¹) Münsterberg, Grundzüge der Psychologie S. 115

(註¹¹¹) Münsterberg, Philosophie der Werte. S. 149-173

七

以上述べて來た所で明かであるが如く、歴史に對する認識論上の見地には根本的の相違のあることが

分かる。まづ第一ショーベンハウエルを始めとして、ヴァキンデルバントやリッカートは自然科學は經驗の普遍の方面を取扱ひ歴史はこれとは反対に其の特殊の方面を取扱ふものであると云つてゐる。所がミンスターべルヒは特殊と普遍とは科學を分類する根據とするには足りない。何故かと云ふと、自然科學であつてもやはり特殊を取扱ひもするし歴史科學であつても普遍を取扱ふことが出來得るからである、と考へてゐるのである。茲に反対が存してゐる譯であるが、この反対は如何に解決さるべきであらうか。

これに就いてフリツシユアアイゼン、ケーラーはかう云ふやうに論じてゐる(註一)ある範圍内に於いては自然科學的思惟なるものが少なくとも其の一般の傾向上普遍に於いて規定するものであることは疑はない。動物學や植物學のやうな所謂叙述的自然科學の系統に現はれる分類的概念形成が十分に抽象のこの手續を明示してゐる。けれどもかう云ふ手續は古いもので自然科學的思惟一般に取つて模範的のもとのと云ふことは出來ない。寧ろ近代の自然科學と云ふものは空疎不確的な普遍化的抽象を除いて了ふ手段を發達せしめるに至つた。それでさう云ふ自然科學の精確な概念は對象の個別性の雜多を除き去つて了ふものではなくして、斷へず個別的なものに戻つて來るのである。と云ふのは結局個別的なものを合法的に生ぜしめると云ふのが其の目的であるからである。而して數學的概念であつても其の數に洩れない。否、理論的自然科學は數學の助けがあるので經驗をばあらゆる個別的特徴に至るまで之を解することが出來られるのである。其の證據は個別的な事實を研究する科學に於いて覓めらる殊に天文學は自然科學には一寸不可能のやうに思はれる一回限りの過程及び事象をば純粹自然科學的概念で以つて

描寫することが原理上出來得られると云ふことを示して居るのである。

然しウキンデルバントはこれに對してかう論する(註・二)。特殊的な個別的なものを自然科學的な手續を採る所の科學で以つて解する例として殆んど常に物理學と天文學とが擧げられるのであるが、それは理由のないことではない。一體物理學と數學とは其の對象に數學を應用するのであるからして、さう云ふ科學に於ける概念形成は數へられ量られる現實に限られるのである。而して物體世界の最も普遍的の理論には唯、量的規定だけが入るのである。所が概念と現實との混合からして概念に基づく純粹量的な世界をば現實であるとするやうな間違つた考が起つて來るのである。惟ふに物理學の純粹量的な世界が普遍化的概念形成によつて殘る隈なく認識が出來るものであり、且、其の個別性が計算せられると云ふことは言ふ迄もないことである。何故かと云ふと、粹純量的な世界の内容は其の限りなき異質性を失つたものであるからして、其の同質性だけが數學の助けによつて概念的に完全に理會されることの出來るのは當然のことであるからである。然し純粹量的なものは非現實なものである。單なる延長は何等物體的實在性を含んでゐるものではないのである。それで天文學が固有名を有つて居る個々の星辰の過去及び將來を精密に計算し、日蝕月蝕の時間をば確定するけれども、それは唯、個別的な對象の量的規定を殘る隈なく理解するだけのことである。従つて天文學と雖ども現實的質的個別性を擱むものではない。

かう云ふリッカートの議論に對してフリツシユアイゼン、ケーラーはまた反駁して謂ふ(註・三)。この議論は證明すべき筈のものをば證明してはゐない。惟ふに數學的力學的概念形成は概念的世界に對して

效力を有してゐるものであるからして、質的個別性を擱むことが出来ないと云ふ斷定は支持することの出来ないものである。と云ふのは我々の豫言は唯、概念的現實に於いて行はれ得るだけではなくして、經驗的現實に於いても行はれ、而して常に新な將來の事件をば非常に個別的な特徴に至るまで規定することが出来るからである。物理學者の量的世界なるものは經驗的現實からして量的個別性と質的個別性との間に同位の一定の關係の成立ない程、離れたものではないのである。勿論數學的自然科學は唯、純粹に概念的量的要素を使つてやつて行く而してこの故に現實の十分な豊富は其の中へは入つて來ない。唯、一小部分だけが其の量的特殊性に於いて法則の中に入つて來るに過ぎないには相違ない。けれども其の部分は質的現實からして理解することが出來られるだけではなくして、ある範圍内に於いては事實上それを引きはなすことが出来るのである。現象に於ける質的なものと云ふのをば、我々が質的なものとして體驗する所のものと云ふ意味に解するならば、性質と云ふものはとにかく事實上引きはなすことが出来られるものであるのである。さて天文學が星辰の運行を法則的に規定する限り、確に量だけを見てゐるものであるのは明かである。さりとて星辰をば單なる量として考へなければならぬと云ふ譯はないのである。例せば天文學が星辰の色を研究するごと、其の點に於いては星辰の、我々の體驗として現はれる性質を取扱ふのである。それから精神物理學のやうな科學は理論物理學の勘定に入れないのであるが、最もものとの關係を研究するのであるからして、力學的な自然理論と結合して、質的な個別性をも概念的に確定する可能が生じて來るのである。して見ると何故に精神物理學的識見と物理的認識とを結合して現象の質的豊富をも自然科學的に叙述し説明することが出來得なからうか、解するに苦しんで

ある。それから自然科學と云ふものは普遍化するに方つて研究さるべき對象のある性質を捨て、了ふこと云ふことはリッカートの云ふ通りである。然し是れはリッカートの意味に於ける單純化ではない。と云ふのは普遍化的抽象の場合に於いて差當り眼中に置かない屬性と云ふものが自然科學的系統からしてどこ迄も捨てられて了ふのではなくして、唯、其の場合場合の研究の關聯上除いて置くだけのものであつて、別の關聯に於いてはまた其れが研究の對象となつて來るのである。尤もこれ程完全な研究であつても、與へられた個別性をば、あらゆる性質の描寫せられると云ふやうに、概念的に解すると云ふことは出來得るものではない。是れ現實なるものは盡る所なきものであるからして、自然科學的概念で以つて抄取つて了ふことの出來ない剩餘が何時も殘るのである。けれども是れはあらゆる概念形成の限界であつて、歴史的思惟であつても現實なものをば其の儘に寫すと云ふことは出來得るものではないのである。けれども自然科學的概念形成が發展するに従つて幾分精確に個別性に近づくことが出來られるのである。而して現實なものゝあらゆる科學的加工に於いて、何時でも直觀が最後のものとして存するのである。で直觀をば殘る所なく概念の形にして了ふと云ふことは問題ではない。是れ不可能のことであるからである。で我々には概念によつて直觀をば支配し規定し闡明することが出來、且、何時でも直觀に戻ることが出來ればそれで足るのである。それから今一つの限界が最も完全な認識にも置かれてゐると云ふことがかう云ふ關聯からして出て來るのであるが、それは現象の事實の中には殘ることなく説明することの出來ないあるものの與へられてゐると云ふことである。かう云ふ所にまた科學的思惟の經驗的現實に對する關係が現はれてゐるのである。天文學に於いて法則を含んでゐる判斷が

單に個別的な事實を確立する判断と並び立つてゐるだけではなくして、寧ろ法則を含んでゐるとの判断もそれが效力を有し且、應用せられ得る條件として事實に關する判断を豫想してゐるのである。而して世界が其の全體に於いて一回限りのものとして我々に與へられてゐる限り、我々の量も普遍な知識であつても個別的に規定されてゐるものに對する其の關係は決して除去することの出來ないものである。

リッカートに對するフリツ・シュアイゼン、ケーラーの論點は、一方は自然科學は普遍を取扱ふものであるが歴史は特殊を取扱ふ所のものである。而して自然科學の中には特殊を取扱ふやうに見えるものもあるけれども、然しこれを唯、量的に取扱ふものではないのである。と云ふのである。所が一方は實際自然科學であつても唯、普遍だけを取扱ふものではなくして、特殊をも取扱ふのである。而して又、自然科學であつても量的關係だけを考察するものではなくして、質的關係をも考察すると云ふのである。さてかう云ふ意見の相違は何處から起つて來るのであらうか。自分の考へる所では一方は概念の定義から出發して科學の分類を規定せようと云ふのであるが、一方は現今の科學の實際からして論を進めて行かうとする所に爭論の根據が存して居るものやうに思ふのである。一體認識論的に科學の分類を行はうと云ふには、其の根柢たる所の概念の規定から始めなければならないのは當然のことである。さればリッカートの採つた方法は間違つてゐるとは云へない。けれども渠の自然科學及び歴史の分類の基礎とした普遍と特殊と云ふ概念の區別が果して科學分類の基礎たる價値があるかどうかと云ふことが問題となるのである。今日の自然科學に於いてもリッカートの云ふ通り通常普遍概念即ち法則を覗めるものであることは許さなければならぬ。従つて自然科學に於いては通常個々の事

象は單に類の見本として取扱はれるに過ぎないと言ふことも許さなければならぬ。然し自然科學が特殊の事象を絶対に取扱ひ得ぬと云ふことは出來ぬ。例せば天文學に於いてある特殊の變光星の研究の如きは決して類の見本として研究するのではなくして、其の特殊性に對する興味の上からして之を研究するのである。而して其の研究が單なる量的研究に止まるものでないことも言を俟たぬ。それから歴史は特殊を取扱ふものであると云ふのであるけれども、ショーペンハウエルの如く歴史を以つて唯、特殊な事件の聚積である年代記とは見ずして、ウキンデルバントやリツカートのやうに、特殊な事件の因果關聯を覗めようとするものであるとすると、各の歴史はそれぞれ個別的な史的生活を描き出すには相違ないのであるけれども、然し特殊な事件と事件との間に何等かの必然的な因果關聯を附けようとするものであるからして、既に普遍なものと云はなければならない。然しかう云ふこと、ヴィンデルバントやリツカートは歴史に於ける現實的因果關聯なるものは自然科學に於ける合法的因果關聯とは異つてゐる。兩者とも必然の關係ではあるが、同一のものではない。何故かと云ふとあらゆる現實なものは個別的なものである從つてその因果關聯も一回限りの個別的過程の性質を有つてゐる。それで客觀的現實の中に於いては唯、個別的な因果關聯があるだけであるが、自然科學に於ける因果の法則と云ふものは現實な因果關聯の多數に共通した普遍的内容を表はしてゐる。而して多數の現實的因果關聯に共通なものは唯、普遍概念の中に、從つて抽象の產物の中に存するだけのものであると主張するのである。然し個別的因果の關聯であつても、因果の法則其物と全く關係のないものではない。リツカートも述べてゐる如く(註、四) 歷史的因果關聯の描寫は唯、概念の助けによつてのみ可能であるし、普遍的

因果概念即ち自然法則なるも要素として歴史的因果關聯の中に含まれてゐるのである。が個別化する歴史的方法と普遍化する自然科學的方法との差別は唯、其の目的を異にしてゐるだけのものである。即ち一方は普遍的因果の法則に達しようと言ふのであるが、一方は個別的因果關聯を明かにしようと云ふに在るのである。而かも科學的描寫の手段に至つては兩者別に異はないのである。して見ると歴史であつてもやはり普遍を取扱ふのである。然し歴史に於いて普遍を取扱ふにしても特殊化する目的の下に之を取扱ふのであるからして、自然科學の場合とは自から相違があると云ふのである。然らば自然科學に於いては特殊化する目的で以つて普遍を取扱ふ場合がないかと云ふと、決してさうではない。フリツシユアイゼン、ケーラーも謂つてゐる通り自然科學に於いて法則を立てるのは結局現實を説明せようと云ふが爲であるし、且、普遍的法則からして個別的な特殊なものを作り出さうと云ふことも行はれてゐるのである。して見ると云ふと、自然科學に於いても特殊化する目的の全く存しない譯ではないのである。唯、自然科學に於いては普遍化する場合が勝つて居り、歴史の場合に於いて特殊化する場合が勝つて居るだけのことである。かう云ふ點から見ると、ミンスター・ベルヒが自然科學も歴史も共に普遍と特殊とを取扱ふことが出来る而して普遍と特殊とは相反するものではないと云つてゐるのを以つて正しいとせなければならぬ。以上のやうに考へて來ると、普遍と特殊と云ふ概念の區別を基礎として經驗科學を分類せようと言ふことは、當を得たものと云ふことが出來ぬ。従つて歴史を以つて特殊と同一意味のものを解せようと云ふことは當を得たものと云ふことが出來ぬ。

それからヴァキンデル・パントやリツカートは歴史を以つて形式的見地から考察すると特殊を取扱ふも

のであるが、實質的見地から考察すると文化を取扱ふものであると云ふのであるが、さうすること、特殊なるものの、意味が内容上の制限を受けて來ると云ふことになるのである。一體ヴァキンデルバントにしてもリッカートにしても一面に於いては形式上特殊化の見地からの考察を以つて悉く歴史的考察であると論じてゐるのであるが、又、一面に於いては實質上からして文化價値を取扱ふものを以つて歴史であるとして居るのである。するに特殊なるものと文化價値とはどう云ふ關係を爲して居るかと云ふ疑問が起つて來るのである。何故に特殊なるものを文化價値だけに限らなければならぬかと云ふ疑問が起つて來るのである。所でリッカートがこの點に就いて論ずる所を見るとかうである(註五)。我々には全く無關係な對象であつても、描き出さうと思へば其の個別性に従つて描き出すことが出來られる。さう云ふ場合に於いては意志の働きが其の個別性をば大切なものにして而して價値關係を付けるのである。それで文化價値には關係がなくとも個別化的描寫の可能であると云ふことは疑ふことが出來ないけれどもこれだけではまだ科學の分類に取つて何等の意義を有してゐないのである。何故かと云ふと、さう云ふ個別的概念は全く勝手に形成せられたものであるからである。何人でも自分に取つて實際的意味を有つてゐると云ふ所からして其の個別性に於ける現實をば知つてはゐるが、それは科學的な概念形成とは何等關係のないものである。そこで文化の普遍的な價値の見地によつて導かれずして一對象の個別性が終極的に科學的に描寫されるかどうかと云ふことが問題となつて來るのである。がこの問題に對しては、否と答へるの他はない。是れは例を擧げて容易に其の理由を示すことが出來られるのである。さて地理學と云ふものは實際上大部分自然科學的概念形成と文化史的概念形成の混合よりなるものであるが其

要素は概念上峻別することが出来るのである。地球の表面が文化發展の舞臺であるとせられるならば、其の場合には文化の價值の見地が其の成立には缺くことが出来ない而して又、其の發達に影響する地理學的條件に移されたものである。而して地球の表面がそれと結合せる文化學的興味のある所からして其の個別性によつて主要なものとなるのである。而して地理學の個別化的概念形成はかう云ふ場合に於いては普遍的文化價值によつて導かれたものである。而して地理學の個別化的概念形成はかう云ふ場合に於いては普遍的文化價值によつて主要なものとなるのである。が同じ對象がまた地質學的理論の形成に取つて大切なものとなるのである。さう云ふ場合に於いては普遍化的概念形成が行はれて、文化の歴史に取つて其の特質其の個別性によつて大切である所のものが、單に類の見本として考察せられるのである。それからまた地理學に於いては文化と何等の關係もない一定の部分の個別化的描寫があるのであるが、それに對して最も廣い意味での歴史との關係若くば普遍化的理論との關係が缺けてゐるならば、唯、材料を見るの他はない。材料を集めようと云ふ意志が其の對象をして大切なものたらしめ、價值關係を生ずるに至るのである。而して其の價值關係によつて個別性が主要なものとなるのである。がさう云ふ描寫をば科學の區分の中に入れる譯には行かない。是れは個別化するけれども其の對象の文化價值に對する關係の全く缺けてゐるやうに思はれるすべての描寫に同じく當然まるのである。蓋しあう云ふ個別化的描寫の起つて來るのは何等かの理由によつて其の對象が殊に人の注意を惹き興味を起さす所に基づくのである。而して注意を惹き興味を起さす所からして價值關係が生じ其の對象の個別性を知らうと云ふ欲求が起つては來るけれども何等文化價值を有するものではない。従つてそれが自然科學的理論に對する關係を缺いてゐるならばさう云ふ事實上の知識は科學の中には算へられないものであるのであ

る。文化的意味を缺いてはゐるけれども其の個別性が興味を與へる對象の中に例せば月が屬してゐる。一體月はある點に於いては大體の一般的理論を構成する材料として考察されるのであるが、また屢其の個別性が、文化科學的見地の存せないにも係はらず描寫せられるのである。是れ我々が月に對してもつかしみを感じると云ふやうな非科學的な興味に基づいてゐるのである。かう云ふやうな例によつても分かる通り、個別的描寫なるものが普遍的價値即ち文化價値によつて導かれてゐる場合に於いて科學的のものと云ふことが出來られるのである。かう云ふ普遍的價値の缺けてゐる場合には對象は唯、類の見本として科學的意味を有するに過ぎないのである。それから價値關係は後に科學的加工を施さうと云ふ考からして起つて來ることがあるのであるが、さう云ふ場合には個別的描寫の成立つには相違ないけれども普遍的文化價値に對する關係が缺けてゐるのであるからして唯、材料と考へらるべきものである。單なる事實の確立其物だけでは科學ではないと、云ふのである。して見ると、普遍的價値即ち文化價値によつて導かれない場合には特殊なものゝ描寫も科學の中に入ることは出來ないと云ふのである。従つて歴史の概念の形式的見解と實質的見解とは一致することの出來ないと云ふのである。従つて形式的見解と實質的見解の間にかう云ふ齟齬の起つて來たのは要するに普遍と特殊と云ふ概念の差別を以つて科學分類の一面の基礎とした所に在るものと云つてよからう。自分の考へる所ではミュンスター・ベルヒがヴァキンデルバントやリッカートの法論的見地に對して本體論的見地を主張した所に餘程意義があるやうに思ふ。蓋し科學の分類に於いては論理的方法が先に立つべきものではなくして、内容が先に立たなければならぬ。而して其の内容によつて方法も自から規定されて來るであらう。然らば

如何なる内容が科學分類の基礎概念であるべきかと云ふと、自分の考へる所では文化の概念其物に他ならぬ而してこの文化概念なるものが眞に自然に對立する所のものであるのである。

文化の概念に就いてはリッカートの謂つてゐる所其の當を得てゐる。渠は曰ふ（註六）文化と云ふ語は原來土地の耕作の意味に使はれたのであるが、今日では普通、社會の成員の大切に思ひ若くば其の世話をしなければならない財寶を指すことになつてゐる。それで文化價値なるものは正しく普遍的社會的な價値である、而して自然と文化の反対が、自然科學の實質的概念に對する歴史科學の實質的概念をして終極的發展を遂げさせ得しめる。文化、るものは民族の生活に於ける共同の仕事であり、人が何人にも認めらるべき歴史的意味を得て來るのは其の財寶の價値に就いてであり、本質的なものゝ選擇に於いて歴史的描寫と歴史的概念形成とを導くものは其の財寶にくつ付いてゐる普遍的文化價値であるのであると。けれどもリッカートは文化と云ふ普遍的價値の關聯を説くに至つて其の實在性を離れて之を客觀的に考察するに至つた。何故かと云ふと、渠は歴史に於ける事件と事件との關聯を以つて因果的關聯であると見たからである。一體文化なるのはリッカート自身が説いてゐる通り（註七）評價された目的に従つて行動する人間の直接に作り出したもの若くばもとより存するものにしても其れが價値を有つてゐる所からして、人間が故意に手を加へたものであるのである。で若し文化其物を生きた實在のまゝに解するならば、目的なるものをどうしても考察して來なければならぬ筈である。然るにリッカートは歴史から目的を除き去つて了つて、唯、事件と事件との必然的因果關聯を覗めようとするのである。それで渠は歴史科學の對象たる所の文化は、自然科學の對象たる所の自然とは異つて、人間の作

爲になるもの若くば人間の手を加へたものであるからして、價値關係があると云ふのであるけれども、之を考察する場合には、自然科學が其の對象たる所の自然を考察すると同じやうに、單に與へられた事實として其の關聯を覗めるのである。而してさう點から云ふと、リツカートが峻別せようと努めてゐる自然科學の探る所の方法と少しも變りはないのである。が唯、一方の關聯は個別的であるが、一方の關聯は普遍的であると云ふ異があるだけである。換言すると、一方は具象的であり、一方は抽象的であると云ふ異があるだけである。兩者いづれも必然性を具へてゐると云ふ點に於いては全く同一であるのである。さてかう云ふ考察の方法によつては其實在性に於ける文化なるものゝ關聯を明かにすることが出來るかと云ふと、どうしても否と答へざるを得ないのである。それでヴァキンデルバントやリツカートの歴史考察の方法と云ふものはいはゞ文化なるものをば殺して了つて置いて、而して其の關聯を覗めると云つたやうなものである。彼等は頻りに歴史は現實を取扱ふけれども自然科學は現實を離れた抽象を取扱ふものであると云ふけれども、其の現實なるものはやはり生きたまゝの現實ではないのである。それで生きたまゝの文化を歴史が生きたまゝに取扱ふと云ふには、どうしても其の目的關聯を覗めるの他はないのである。従つて歴史の方法は目的論的のものでなければならぬ。即ち歴史の事實は價値關係の事實であるからして、價值關係のまゝに取扱はれなければならぬ。是れ文化の概念其物からして必然に起つて来る所の方法である。歴史の考察方法は目的論的のものでなければならぬと云ふことはミュンスターベルヒの既に主張した所であるが、自分もまた歴史の對象たる文化其物の性質からしてさうなければならないものと考へる。さて歴史は目的論的に考察されなければならぬと云つたから

とて、歴史の事實に對して因果的考察が出來ないと言ふのではない。唯、因果的考察の方法を採つて歴史の事實を取扱ふと云ふことになる。眞の歴史からは遠ざかつて來ると云ふだけのことである。方法論上自然科學的性質のものとなると云ふだけのことである。かう云ふと目的論的に關聯の付けらるべき文化の事實に對して、如何にして因果論的關聯が付けられる事になるであらうかと云ふ疑問が起つて来るであらう。がこの疑問に答へることは敢て難事ではない。一體因果の關係と云ふものは客觀的な事象其のものゝ中に存してゐるではなくして繼起する一定の事象に對して主觀が因果と云ふ範疇に由つて之を理解して來るのである。それで事象と事象との間に必然に相續き若くば一つの事象は他の事象に必然に先だつものであると考へられる場合には二つの事象は因果關聯を爲してゐると云はれるのである。それで目的に従つて行動する人間の行爲から成る所の文化であつても、繼起する所の個々の事實さへ與へられるならば、全く目的なるものを見ずして、因果考察の法式をこれに當嵌めることが出来るのである。かくして出來上つたものに對してヴァキンデルバントやリッカートは歴史と云ふ名を冠らしめるのである。而してさう云ふ風にして出來た特殊な歴史の多數から抽象されて來ると、社會學的法則と云ふやうなものが出來て來ると云ふのである。然しそヴァキンデルバントやリッカートの意味に於ける歴史と云ふものは法則の學としての社會科學に至る前階を爲してゐる所のもので、其の論理的性質の全く異つたものではないのである。蓋し社會科學なるものは歴史を豫想するものではあるけれども、歴史其物は社會科學とは全く其の本質を異にしてゐるものである。と云ふのは、一は目的論的見地に立ち、一は因果的見地に立つて文化を考察する所のものである。言ひ換へると、一は其の實在性に於いて文化を考

察し、¹ は其の實在性を抽象して文化を考察するのである。要するに歴史なるものは眞に目的論的のものであつて、リッカートの「ふやうに唯、其の對象が價値關係を有つてゐるものからして、其の點に於いて目的論的のものであると言ふに止まるものではない」のである。

尙、最後に一言論じて置かなければならぬのは、歴史と現實との關係である。かのヴァンデルバントはかう「ふやうに説いてゐる(註^八)歴史なるものは人間の總體の記憶ではなくして、批判的に整齊せられた記憶である。従つて選擇を選擇せられたものへ新たな整齊²を意味してゐる、そこで歴史は與へられた現實をそのまゝを寫したものでなくして、選み取られた事實からして新なるものを創造するのである。其處に歴史の客觀性に對する限界が認識せられる。リッカートも與へられた限りなき雜多からして文化價値の標準によつて歴史的事實が選み出されて來ると説いてゐることは既に前に述べた通りである。して見るに、歴史なるものが與へられた現實を其のまゝ寫したものでないのは明かである。一體歴史の目的とする所は史的生活をば本來の相に於いて描き出すに在るのであるが、其の史的生活なるものは與へられたものではなくして、問題として與へられたものであるのである。されば歴史なるものは『實際あつたやうに物語る』(註^九) ふやうなものであるべくものでもなければ、又、あり得るものでもない」のである。

(註^一) Frischeisen-Köhler, Wissenschaft und Wirklichkeit, S. 147-148.

(註^二) Windelband, Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft, S. 114 ff.

(註^三) Frischeisen-Köhler, Wissenschaft und Wirklichkeit, S. 149 ff.

(註一) Rickert, Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung S. 353-389

(註二) Ebenda S. 504-535

Rickert, Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft. S. 148-155

(註三) Rickert, Die Grenzen der naturwissenschaftlichen Begriffsbildung. S. 509

(註四) Rickert, Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft. S. 21

(註五) Windelband, Geschichtsphilosophie. S. 40-42

(註六) 明に「人間の體からして見ても、人間は個體として體積からして虫と類似する。しかし、その本質では蟲とは根本的に異なる。」歴史 - 哲學 - 政治の問題。上巻。第二章。蟲の本質である事は明白である。

Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik Bd. XXIX S. 170 参照。

川 合 一